平成29年 7月号（246号）
（皇紀2677年）　毎月1日発行

新風

編集人　瀬戸　開
発行人　魚谷哲央
年間購読料＝2,000円

維新政党新風本部
〒604-0934 京都市中京区麩屋町通二条下ル
第2ふじビル4階
TEL.075-708-3700 FAX.075-708-3800
http://shimpu.jpn.org/
otayori@shimpu.jpn.org

安易な核武装論を排す
～国防戦略構築が急務～

佐藤　守（軍事評論家、元空将）

核防御論のない核武装論は無意味だ

平成四（一九九二）年、「北朝鮮がノドンミサイルを開発」と報道されたが、政治家は国防に無関心、世はバブルに浮かれてゐて、高級官僚や企業役員らはクラブでカラオケ三昧だつたから、頻発する拉致事件はじめ迫りくる国難に目を向ける者は誰もゐなかつた。

極貧に喘いでゐるはずの北朝鮮は、ロシア製ミサイルを改良して一九九〇年代初めには開発を完了してゐた。

そして一九九三年五月、報道から一年後に能登半島沖に発射したが、それでもなほ政府は重い腰を挙げなかつた。

あれから二四年経つた今、金正恩のミサイル連射に慌てふためき、国民への退避要領を模索する有様。いざとなると憲法を盾に軍事的負担を忌避するわが政府を、米国は頼りにならない同盟国だと軽蔑し、時の国務副長官から「もつと存在感を出せ」と発破をかけられる始末。他方国内には一九七二年の米中国交回復時にニクソンと毛沢東間にあつたとされる「対日密約」を盾にして、自主的防衛力どころか、国家戦略すら構築せず今日まで来た。

実はこの時、わが国は英国と同じ海洋国家として、台湾・東シナ海・朝鮮半島を視野に入れた国家戦略を構築すべきだつたのである。これが独立国、経済大国だと自慢出来ようか？

今回の北朝鮮のミサイル連射を機に保守派論客の中に「日本も核武装すべきだ」との声が高まつたが、私は「核武装を論じる前に、核攻撃からの防御をどう考へてゐるのか」と問ひたい。

一九五〇年に毛沢東は「核を保有しなければ、米国に侮られる」と核兵器開発に着手したが、同時に北京周辺に大地下壕を掘つて各種軍事施設を移設し、現在も地下施設を整備中である。勿論米国も旧ソ連もさうだつたが、核武装するといふことは、同時に核攻撃から国家の中枢機能および軍事施設を防御するため地下要塞化が不可欠なのだ。

俄かに高まつた核武装論は、私には昔のガダルカナル戦と同様の思ひ付きの突撃思想にしか映らない。

今求められるのは基本的な国家戦略の構築

「日本の技術力があれば、核兵器開発など一ケ月もあれば出来る」と豪語する者もゐるが、スパイ防止法もない状態だから核拡散に手を貸す様な事態を招けば、世界中の非難を浴びることは目に見えてゐる。また、彼らに「核兵器を陸海空自衛隊のどこに持たせるのか」と問ふと皆返事に詰まる筈だが、海上自衛隊にSLBM潜水艦を装備させると言ふだらう。しかし原子力推進潜水艦を保有しない海上自衛隊が装備するのはナンセンスだ。

まづわが国が核武装する前になすべきことは、いかなる核戦略を構築するかであり、外交評論家・岡崎久彦氏が言つた様に日本の核戦略の基本は日米同盟と戦略的に両立するものでなければならない。米国の外交戦略に反対してきたドゴールのフランス型ではなく、英国型でなければ実質的な意味はない。「核武装して米国に対抗する」と言ふに至つては支離滅裂だ。仮に核武装に踏み切れば、核拡散防止条約から脱退することになるが、果たして脱退するだけの覚悟が今の日本政府にあるのだらうか？

核武装するには、基本的な国家戦略を構築した上で国民を説得し、実効ある運用体制を確立することが不可欠である。勿論「唯一の核被爆国」などといふ情緒論は世界には通用しない。

それでも核発射ボタンを常時預かる内閣総理大臣が、「その時」冷静・的確に発射命令を下せるとは私にはとても思へない。常時「核発射ケース」を携行して、滞在先まで同行する秘書官が目障りな総理もゐるだらう。逆に外国からは「こけおどし」だと侮られること必至だ。

私は高度な通常型精密兵器を整備して「寄らば斬るぞ！」の姿勢を保つ方が、核兵器を保有して国際的な信用を失ふよりも効果的だと考へてゐる。

核武装する国は「強い」のではなく逆に「弱い」のだ。米国もソ連の核兵器増強が怖かつたからこそ、冷戦といふ外交戦（SALTなど）を戦ひ、ソ連を核兵器なしで崩壊させることに成功したのである。核ミサイルにしがみつく金正恩は怯えてゐるのだ。

こんな北朝鮮や中国の恫喝に対して有効なのは「敵基地攻撃能力」を保有することである。　昭和三一年に政府は「…誘導弾などによる攻撃が行はれた場合、他に手段がないと認められる限り、誘導弾などの基地を叩くことは、法理的には自衛の範囲に含まれ、可能である」旨答弁したが、問題は政府の怠慢で「叩く手段」を全く整備してこなかつたことである。

日本の核武装は、世界的話題になるだらうが通常兵器は別である。憲法の条文に関はらず、仮に発射されれば高度な精密兵器で、必ず報復するといふ意思を世界に明言することである。

核武装検討は国として当然

雑誌「正論（平成二三年三月号）」での稲田議員（当時）と私の対談が、彼女が防衛大臣に就任するや国会で吊るし上げの材料になつた。

私はこの対談で「核武装のチャンスは、昭和四七年、佐藤栄作首相の沖縄返還の時点までで、既に時機を失した」と発言した。

沖縄の米軍に「持込み」を認め、国民に「核の傘の信頼性確保のため」と説明してゐれば、核保有論議を高めるチャンスだつたのだが、それを逸したからである。

しかし、稲田氏の発言通り、核保有を「検討」すること、議論を続けることは必要だ。議論すること自体が、日本を狙ふ国に対する大きな抑止力になるからだ。

NPT（核兵器不拡散条約）に「各締約国は、この条約の対象である事項に関連する異常な事態が自国の至高の利益を危ふくしてゐると認める時は、その主権の行使として、この条約から脱退する権利を有する」とある様に、現時点での核武装が現実的ではないとしても、十年後の国際情勢は誰にも予測できない。

今わが国の喫緊の課題は、国家戦略の確立と、憲法九条を改めて自衛隊を認知することである。核武装せずとも防衛力強化手段はいくらでもあるのだ。

本紙の仮名遣について

本紙は歴史的仮名遣で編輯してゐます。歴史的仮名遣は先人が知恵を絞つて完成した仮名遣です。

昭和二十一年内閣訓令の現代仮名遣は語義語法上欠陥が多く、我が国の文化伝統の上に大きな断絶をもたらしました。

先人の言葉に習ひ、文化伝統の維持発展に寄与します。

本紙目次

一頁…
●安易な核武装論を排す
～国防戦略構築が急務～
二頁…
●政策資料　他

新風驟雨（しんぷうしゅう）

▼毎年、梅雨時になると梅干し用の梅を購入する。今年は天候不順で色づきが悪くて青い実が多く、三日程色づくまで玄関に寝かせた。梅雨明けの天日干しにする大小のざるも用意してゐる。去年は紫蘇と一緒に梅酢に漬けたまでは良かつたが、カビにやられた。梅干し作りは、三十年以上やつてゐるが、カビにやられたのは数回で、近年は覚えがない。馴れで管理に油断があつたのだらう。上手く出来た年の梅干しは見事な色だ。密度の深さを思はせる濃厚な美しい朱色で、惚れ惚れする。▼夏期に梅干しは欠かせない。疲労回復もさうだが、腐敗を防ぐから、弁当には必ず入れる。私のやうな酒好きの二日酔ひも防ぐ。日本各地には民間薬としての効能を伝へるものが多い。虫下し、胃腸病、解熱、暑気あたり、目眩、蜂刺され等々。▼今年の梅干しの出来は予測できないが、作る細君を叱咤激励しながら楽しみにしてゐる。私は、身体の調子を崩してから梅干し作りは出来なくなつてしまつたが、伝統の保存食である梅干し作りを薦めたい。▼梅酢はいろいろな使ひ道があるが、我が家では生姜、胡瓜、茗荷、辣韮も漬ける。焼酎に少し入れて、炭酸で割るのもよい。細君の実家も梅干し作りは毎年だ。今年はどちらが上手に作れるだらうか。（藤）